OB-20

慢性意識障害患者のコミュニケーション獲得への一試策

吉田 愛菜[1]、和田 哲也[1,2]、幅　拓矢[1]、井戸 宏美[1]、槇林　優[1]、浅野 好孝[1,2]、篠田　淳[1,2]

[1]木沢記念病院　中部療護センター、[2]岐阜大学大学院　医学系研究科　脳病態解析学講座

頭部外傷などによる慢性意識障害患者のリハビリテーションの目的の一つにコミュニケーションの獲得が挙げられる。意識障害患者の多くは気管切開などによる発語困難を呈し、そのため、補助・代替コミュニケーション手段（AAC : Augmentative & Alternative Communication）を用いることが多い。AAC には電子コミュニケーション・エイド（意思伝達装置）、非電子コミュニケーション・エイド（文字盤など）、サイン、ジェスチャなどが挙げられる。また、実用的なコミュニケーションに必要となる返答の確実性（間違えがないこと）、持続性（質問・返答が繰り返し可能であること）、再現性（同じ質問に対して同じ回答をすること）を獲得することは困難な課題とされている。

今回、我々は、全盲の頭部外傷患者にコミュニケーションの獲得を目標してリハビリテーションを実施した。開始当初、従命動作として右示指の伸展・屈曲が一部可能であることを利用し、「はい」・「いいえ」で回答可能な質問に対して、「はい」と返答する場合は指を伸ばす、「いいえ」と返答する場合は指を曲げるというルールでコミュニケーション獲得を試みた。しかし、筋緊張が亢進するなどの理由で確実性・持続性に問題があった。その後、既存の AAC を利用したが、同様の問題が生じ、コミュニケーションの獲得には至らなかった。そこで、コミュニケーションエイドの機能を必要最小限とすること（「はい」・「いいえ」のみ）、さらに操作の容易な入力デバイスとして特殊なタイピングカバーを用いることでコミュニケーション獲得の一助となったので報告する